

ひょう害からなしを守れ！

「なし振興のために長年の網張りへの挑戦」

栃木県は夏に雷雨が多く、なし農家は毎年降ひょうの恐怖におびえていました。

今回は本県なし産地発展に大きく寄与した。なし園の防ひょう網開発プロジェクトを紹介します。

■防ひょう無くして、なし生産振興はない

「ゴロツ」と雷が聞こえると寿命が、一年縮む。これは、ひょうに對するなし農家の恐怖を表した言葉だ。

降ひょうは、昔から馬の背を分けるというくらい局地的であるが、一度降ひょうに会うと直接なしの果実に被害を及ぼすため、収穫皆無となる。さらに、落葉や新ししょうの折れなどで、その影響は次年度まで及ぶため、なし農家が最も恐れる災害である。

■天災に挑む



写真 ひょう害対策に着手した坂本（後列右から3人目）と後に参加した青木（前列右から2人目）

昭和三十年代、芳賀地方を中心としたひょう害頻発のため、県議会では、ひょう害防止対策を開発せよとの質問が出された。

園芸部の坂本秀之は、ひょう害の防止策を考えていたが、なかなか考えがまとまらなかった。そこで、坂本は、考えあぐねて農林省農業技術

研究所の坪井博士に相談した。博士の回答は、「網を張る以外に防止する方法

はないだろう」だった。その時、坂本は決心した。「網を張ってなし農家を救おう。」

■いよいよ試験開始

昭和三十六年から坂本は、網の展張による初めての防ひょう試験を県内四カ所で開始した。この試験は、一カ所一アール程度にクレモナ（白色、網目一・五×二センチメートル）を張った小規模なものであった。

その後、昭和四十四年からは、十アール規模に拡大してポリエチレン（黒色、網目一・八センチメートル角）を使用し現地で行った。この試験には、坂本に青木秋廣と松浦永一郎が加わった。

当時、なし園に網を張ってまで栽培する必要があるのでの声が多

かった。しかも、なしの価格が低迷していて、なし農家は、網を張ることなど考えてもいなかった。
坂本の夢は、ここで一端途絶え、第一期の試験は中断し現地普及はしなかった。

■夢あきらめきれず

時は流れ、果樹部長になっていた坂本は、昭和五十年に場内で第二期の防ひょう網試験を開始する、透明の寒冷紗（白色、網目一・二五ミリ）が開発されたからである。このときの担当は、松浦に引き継がれていた。



写真 坂本の夢を引き継いだ松浦（左）

この試験を始めるに当たり坂本・松浦は、寒冷紗の被覆の型と風圧やひよりの溜まり具合などを検討し、

入母屋型で、谷にひよりがたまるないように隙間を作るなど工夫をこらした。試行錯誤の末、完成した三十アールの防ひよう網棚には、純白の寒冷紗が張られ、緑のなし園にひよきわ生える存在となった。

しかし、半年後思わぬ事態が松浦を悩ました。それは、純白の寒冷紗が、土埃などで灰色になってしまった。これを見た坂本は命令した。「鬼怒川で洗ってこい。」

早速松浦は、鬼怒川に行き長さ四十メートル幅三十メートルの寒冷紗を川に浸した。その瞬間、思わぬ事態が起こった。網の汚れが落ちるどころか川のノロが網にくっついてしまいかえって汚してしまったのだ。メーカーの話では、汚れは繊維の間に入ってしまい何をやってもとれないとの返事であった。後の祭りであった。

その後数年間に防ひよう網は、数多く開発され、ラッセル網やその他の網の試験を数多く行った。

「人が蚊帳に入らなくなった時

代に、何でなしに網を張るのか」という声がいまだ根強かった。

■降りよう、なし農家の明暗を分ける

昭和五十二年六月十四日十一時から十三時にかけて、鹿沼地方を中心に十五分間大豆大から梅の実大のひよりが襲った。

降りように打ちひしがれたなしは、枝は折れ果実はぼろぼろで、それは見るも無惨な状況であった。

しかし、寒冷紗とラッセル網を被覆したなし園は、この災害から免れ見事に明暗を分けた。



写真 防ひよう網にたまつたひよりの固まり

その時松浦は確信した。「これでいける。」この事実により、防ひよう網架設は、県内なし農家に急速に加速して広まっていった。

網を張る場合最も気になるのは、遮光の影響である。種々の網で検討した結果、透光率八十パーセント以上であれば実用上問題ないとして普及上の指針とした。

■多目的防災網の普及

防ひようをはじめとした多目的防災網の普及は、現在県内なし栽培面積の九十二パーセントに達する。防ひようなくして栃木県のなし生産振興はないと言われたことへの対応は、見事に解決した。

あるなし生産組合の反省会で「防ひよう網がなかったら、俺はなし農家の後継者にはならなかった。」と言われ、松浦は涙が出るほどうれしかったと言う。

松浦は、「なし栽培用多目的防災網の開発」が評価され、平成十一年四月科学技術庁長官賞の表彰を受けた。